

【名 称】 妙林寺銅造千手観音菩薩立像
【技 法】 銅製鑄造
【時 代】 江戸時代
【像 高】 5. 1 cm (台座寸6. 0 c m)
【所在地】 加治町
【所有者】 羽黒山妙林寺

【由 来】

『白河風土記』（文化年間・1804～1818 年）や『開基由緒書覚』（明治 2 年）によると、妙林寺は天長元年（824）和田村（現在の須賀川市和田地区）に慈覚大師が開山した。文安元年（1444）頃、二階堂為氏が鎌倉の法界寺より僧 明栄を伴い下向した折、明栄を妙林寺住職とし、須賀川城二の丸へ移した。天正 1 7 年（1589）の須賀川城合戦において、戦火により堂宇および記録類も焼失したが、蒲生領時代（天正 1 8 年～慶長 3・1590 - 1598）に現在地へ再建された。江戸時代には、境内に三間四方（≒ 5. 5 m）の観音堂が建立され「長ケ三寸銅仏立像」（≒ 9 cm）の本尊が祀られていたことがわかる。

これらの背景や作風から、当該資料は江戸時代に再興造立され、その後観音堂に祀られ現在まで妙林寺で安置されてきたと考えられる。なお、当該資料は二階堂家の守り本尊との伝承をもつが、二階堂家の歴史を後世に語り継ぐため、再興造立された頃に付随されたものと推察される。

【造 形】

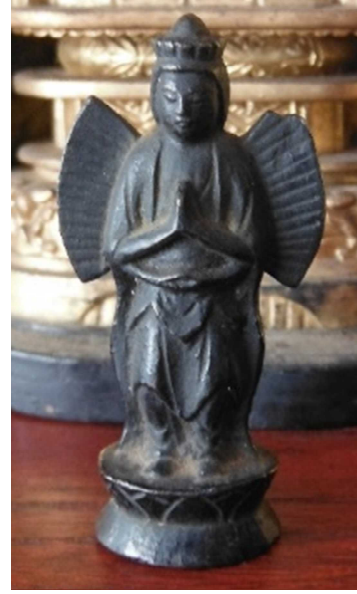
千手観音菩薩立像の小金銅仏で、単髻（たんけい）から台座までの全容を前後合わせ型の一鑄で造り、鑿で仕上げている。無垢鑄造（像内部まで銅がつまっている状態）であるため、小形だが重量がある。

頭髮は単髻で平彫、頭上に六面を配す。胸前で合掌手、腹前で宝鉢手（ほうはつしゅ）をとり、脇手は背面に各十四本を配す。六面三十二臂の姿となり、通常の千手観音より頭上面、脇手ともに省略化されているが、二寸程の小像であるためと考えられる。衣服は、左肩から条帛をまとい、天衣は両腋より体側に垂下する。裙及び腰布は右足内側で右前に打合せる。一般的な千手観音菩薩（十一面四十二臂像）と比較すると六面三十二臂であり、頭上面や脇手の本数に省略化がみられる。顔貌や体軀の造形は顔貌や体部の造形は明確さを欠き、背面は平滑に仕上げられ、鑿跡が残る。肩幅が狭く、両膝を曲げ腰を少し落としたような体軀の造形に鈍さがみられる。形式化がみられる一方で、複雑な千手観音像を小像に収めた細部にこだわる造形技術は江戸時代の特性を示しており、本像は江戸時代の造立と考えられる。

なお、古記録と寸法の差異については、実寸ではなく標準的な法量を記している例も多くあり、当該資料も標準を記したものと考えられる。



〈千手観音菩薩立像と厨子〉



〈本体〉